三島市　（通巻第81号）

郷土資料館だより

Vol.28.　No.3
2005.3.20

企画展「三四呂人形―野口三四郎の芸術―」（3/19～5/29）

▲桃子と里子

▲立ち雛

▲お雛様

◇三四呂人形とお雛様

三月といえば桃の節句、女の子のいる家には雛人形が飾られます。三四呂人形の作者・野口三四郎にも「桃里」というかわいい女の子が一人いました。この桃里ちゃんをモデルにした張子の人形が「桃子」「里子」です（写真左上）。また、桃子、里子を主人公にした「菜の花雛の話」という版画と葉書４枚ほどの短いお話も残されています。江戸時代、貧しい姉妹がお雛さまは買えないので、二人で菜の花のお雛さまを作り、お節句のお祝いをしたお話で、昭和10年の春に桃里ちゃんのために作られたものです。しかし、その年の５月、わずか３歳で桃里ちゃんは亡くなってしまいます。

▲菜の花雛の話

この他に三四郎は幾つかのお雛さまを作製しています。写真右上の「立ち雛」は、淡い水彩で描かれた繊細な着物の文様がどことなく上品に感じられ、反対に「お雛様」は鮮やかな色彩でふくよかなお雛様を表現しています。これらのお雛さまは桃里ちゃんのために作られたものではないかと思われます。さらには内裏雛を浮き彫りし彩色を施した「お雛様絵馬」や、侍と和傘をさした和服の女性が対になったものがあります。この台には「JAPAN」とあり、背景に富士山が描かれています。お雛様というよりも外国の観光客向けに製作されたおみやげかもしれません。

▲お雛様 絵馬

▲JAPAN

◇芸術家・野口三四郎と三島

「三四呂人形」は三島を代表する人形です。作者・野口三四郎の名前から「みよろ」と名付けられました。

その野口三四郎は、明治34年12月に三島町大中島(現・三島市本町)で生まれました。韮山中学校(現・韮山高校)に進み、その後写真家を目指して上京、三越百貨店の早撮り写真技師となります。その際、朝鮮博覧会の写真技師として京城（現・韓国ソウル）へ派遣されたことがきっかけとなって、帰京後人形製作に取り組みます。そして三越で知り合った入野しげさんと結婚、子供の誕生と生活も軌道に乗り始めます。折しもこの頃人形芸術運動が盛んになり、後の人形界を代表するメンバー（鹿児島寿蔵、堀柳女、野口光彦ら）と甲戌会を結成します。しかし、昭和9年には妻・しげさんを、翌10年には娘・桃里を相次いで亡くします。昭和11年には人形芸術院賞を受賞し各方面から賛辞を送られるものの、翌12年2月にこの世を去ってしまいます。わずか35年の短い生涯を駆け抜けるように生きた人でした。

▲自画像

▲水辺興談

こうした三四郎の波乱に富んだ一生を支えたのは、彼を育んだ故郷・三島ではなかったかと思われます。それは「水辺興談」をはじめとする多くの三四呂人形に見事に表現されています。

代表作「水辺興談」はあふれるような三島の清流で、捕ったばかりの魚を手のひらに、裸ん坊で得意顔の二人の男の子が主題です。これは昭和11年に開催された第1回総合人形芸術展覧会において最高賞である人形芸術院賞を受賞した作品です。三島の広瀬（現泉町・芝本町）付近を流れる源兵衛川で水遊びをする甥の野口兄弟がモデルになったといわれています(写真)。湧水が豊富な三島ならではの作品で、往時の三島が偲ばれます。

▲甥の野口兄弟
（泉町、芝本町の広瀬付近）

～三四呂人形・紙上展覧会～

▲春日庭

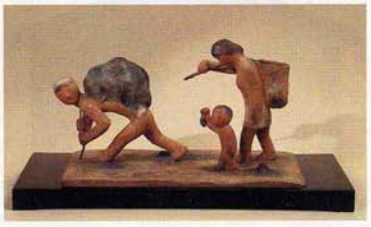
▲メリーさん

▲はなこさん

▲てるてる坊主

▲五月の賦

▲春


▲磯

◇三四呂（三四郎）の見た朝鮮風景

芸術家・野口三四郎を語る上で、昭和4年の朝鮮半島旅行は見逃すことの出来ない重要なポイントとなります。と同時に、三四郎自身にとっても大きな人生の転機であった事は間違いありません。

▲京城博覧会呼物ノーツ
自動写真撮影館全景（三四郎画）

前述のように、三越の早撮り写真技師として働いていた三四郎は、昭和4年に開催された朝鮮博覧会の自動写真撮影館（写真右）の技師として京城へ派遣されます。博覧会は10月末日で終了しますが、すぐに東京へ戻らず、その後1ヶ月ほど朝鮮半島を旅行しスケッチを重ねます。山村の風景、水を汲む女性、農夫や遊ぶ子供達など、水彩の軽妙なタッチで描かれたその数はかなりのものです。

写真は「官妓」という作品です。色鮮やかな民族衣裳を身にまとった官妓（妓生）の舞踊がモチーフとなっており、写真右はそのスケッチです。ちなみに官妓とは、高麗王朝以後の朝鮮で、歌舞や妓楽などで宮廷に仕えた女性のこと。大きく上げた左手と胴体部分が、張子特有の軽みによって絶妙なバランスを保っています。朝鮮半島に暮らす人々の生活や風景は三四郎の芸術魂を大いに刺激したに相違ありません。以後これらのスケッチから「水を汲む半島の女」「牛追い」「つなわたり」など、多くの作品が生み出されます。

▲官妓

▲朝鮮風俗　女の巻　其ノ三

◇三四郎の芸術・三四呂人形

三四呂人形の特徴は、素朴で生き生きと遊んでいる子供の姿や暮らしの中に生きる人々をテーマにしたところです。遊びや生活の中の一瞬の表情を切り取る－これはまさに写真師であった三四郎ならではの作風であったと思われます。そしてこれらを表現するための手段が“張子”という技法でした。張子独特の和紙の軽みと暖かさが融合することで、はじめて三四郎の理想とする世界が表現できたのです。「影ふみ」という作品では、子供たちがはしゃぎまわる一場面をまるで写真のごとく切り取って表現していると同時に、写真では得難い独特の暖かみ—三四呂ワールド—とでもいうような雰囲気が随所に感じられます。三四呂人形が作り出す無類に愛らしいメルヘンの世界は、このように生み出されたものです。

▲影ふみ

▲パラソル

▲黒猫

▲ねむり猫

私たちは、今回の企画展を通じて、もっともっとたくさんの方々に三四呂人形の魅力を伝えたいと願っています。

▲少年の四季（冬）

郷土資料館運営協議会研修視察報告

視察先　豊橋市二川宿本陣資料館ー新居関所史料館ー大旅籠 紀伊国屋

平成16年10月7日運営協議会委員研修で、県西部と近隣の宿場の本陣と関所を訪ねました。

愛知県豊橋市二川(ふたがわ)宿本陣資料館では修復された江戸時代の本陣建物と、隣接する展示館、資料館の設立経過、運営状況、事業内容等について館長よりご説明いただきました。

▲本陣資料館と街並み

二川宿本陣は、文化4年(1807)から明治3年(1870)まで本陣職を勤めた馬場家の遺構を、改修工事により主屋・玄関棟・書院棟・土蔵等を江戸時代の姿に復原し、大名や公家など貴人の宿舎であった建物を公開しています。展示館では、江戸時代の街道を中心に、『東海道』『二川宿』『本陣』の三つをテーマを柱としています。『本陣』では、馬場家本陣伝来の二川宿本陣宿帳(愛知県指定有形民俗文化財)のほか、調度品を展示しています。また本陣の一日をビデオで解説し、パネル等により機能・形態・利用状況等を紹介しています。『二川宿』では、宿駅の主な機能の一つである人馬継立(つぎたて)を行っていた問屋場や、その補助的役割を果たした助郷(すけごう)を、主として文書資料の展示によって解説し、あわせて二川宿の模型やパネルにより宿民の生活や文化を紹介しています。

▲本陣上段の間

▲本陣資料館展示館

▲新居関所

▲面番所内（関所役人）

▲大旅籠　紀伊国屋

二川の旧東海道は、現在も道路が拡幅されていないため、往時の名残(なごり)をとどめており、また隣接の旅籠(はたご)を市が購入し現在復元工事をしています。また後日には街道を実感できることでしょう。

新居関所は、明治以後に残る国内で唯一現存する建物です。ボランティアガイドから建物と、隣接する新居関所史料館の説明を受けました。常設展では、関所に関係した文献や遺品、旅道具などを展示しており、当時の交通史や旅の様子を知ることができます。現在、町では関所構内の整備復元を計画しており、構内全体の整備は、平成20年の完成を予定しています。また町では、関所整備にあわせ、昨年から公開している大旅籠「紀伊国屋」の建物を見学しました。

◆二川本陣資料館　　http://www.toyohaku.gr.jp/honjin/
愛知県豊橋市二川町字中町65　Tel 0532(41)8580

◆新居関所史料館
静岡県浜名郡新居町新居1227－5　Tel 053(594)3615

箱根東坂を歩く　報告

平成16年11月6日(土)

講師　大和田　公一氏（箱根町立郷土資料館学芸員）

今回の講座では、箱根の東坂を、当時の石畳を歩きながら箱根の関所から甘酒茶屋まで探訪しました。また、箱根町立郷土資料館と早雲寺を訪ね、かつて箱根を行き交う人々への関心を深めました。

▲箱根の関所

コース

楽寿園前⇒箱根の関所―(徒歩)→甘酒茶屋(昼)⇒畑宿(寄木会館・一里塚)⇒箱根町立郷土資料館―(徒歩)→早雲寺⇒楽寿園前

▲石畳を歩く

▲畑宿茶屋本陣跡

▲早雲寺

富士・沼津・三島３市共同企画展

「暮らしの中の食文化」　報告

開催期間　平成16年11月17日(日)～平成17年2月27日(日)

資料点数　271点　展示パネル　81点　　入館者 10,617人

この企画展では、県東部・伊豆の食文化を中心に、伝統的な食と現代の食生活を比較できるよう工夫しました。郷土の日常食として、「ナベヤキ」には懐かしむ声が多くありましたが、地域的に日常食べられているものの、郷土料理まで高められることなく忘れられる食べものもあるようです。

本年の三島市民カレンダーは「地産地消」をテーマとしていますが、同じ意味で今回の展示コーナーに「Food(フード)は風土(ふうど)」というコーナーを設けました。この考え方は古来より「身土不二(しんどふじ)」という言葉に表され、「体と土地は不可分」、住んでいる所の四里四方(16km四方)の物を食べて暮らせば健康でいられるといわれてきました。かつては地場の食材を地域の風味で食していましたが、現在は流通、食品添加物の伸長により全国的に、また季節に関係なく口にすることができます。

展示を通じかつての味覚を思い起こしながら、現在の食の問題、またこれからのあり方を考える端緒となったと思います。

▲三島・伊豆の食文化

▲祝いごとの食文化

▲学校給食の変遷

寄贈品のご紹介

平成16年10月から12月のあいだに、次の方々からご寄贈のご協力いただきました。
ありがとうございました。
（敬称略）

池田恵江（芝本町）
三四呂人形　3点
牛追い、おひな様絵馬、メリーさん

伊東晴枝（新谷）
雑誌　10点
ホーロー看板　2点

大武恵子（千枚原）
棒ばかり（金属製）　1点
分銅（二十貫用）　1点

山口弘子（大宮町）
陶製湯たんぽ　1点

▲陶製湯たんぽ（昭和初期）

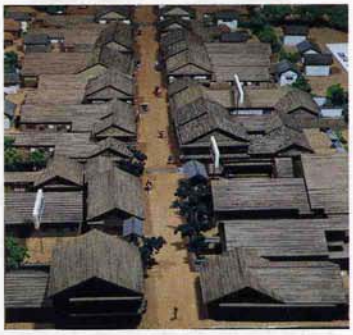
本町ビル「ふるさと歴史文学コーナー」オープン

平成17年4月1日より、三島市中心部、本町大通商店街の旧「ネクステージ三島」跡地に21階建ての再開発ビル「本町タワー」がオープンします。
この4階フロアは三島市が公益施設「本町プラザ」として取得しました。子育て支援センターや市民活動センターなど、市民が集う交流の拠点として整備され、にぎわいの創出効果が期待されています。

その本町プラザの一角に「ふるさと歴史文学コーナー」が新たに設けられます。述べ床面積約106㎡の展示コーナーは「三島の歴史と文化」「ふるさとの文学」の展示が予定されています。郷土資料館は「三島の歴史と文化」、三島市立図書館が「ふるさとの文学コーナー」の展示を担当します。

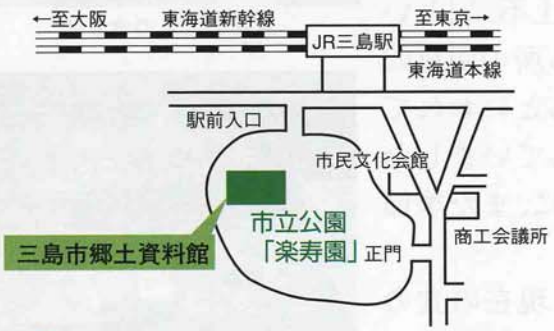
郷土資料館では4月から10月の期間「三島宿の時代」をテーマに、三島の浮世絵、宿場絵図、本陣模型、三島暦など、江戸時代の三島宿のにぎわいを彷彿させる資料を展示し、最も繁栄した時代の三島を紹介します。是非、お立ち寄りください。

▲三島の浮世絵


▲三島宿復元模型

利用案内

休館日　毎週月曜日（祝日の時は翌日）
12月27日～1月2日
開館時間　午前9時～午後4時30分（11/1~3/31まで）
午前9時～午後5時（4/1~10/31まで）
入場無料　（但し、楽寿園入園の際、有料）



●三島駅（南口）から徒歩5分。市立公園楽寿園内

郷土資料館だより　Vol.28　No3(第81号)

発行日　平成17年（2005）3月25日
（年3回発行）

編　集　三島市郷土資料館
〒411-0036
三島市一番町19-3　楽寿園内
TEL 055-971-8228
FAX 055-981-3730
E-mail ： kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp
URL：http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo
発　行　三島市教育委員会